

万引繰り返し…有罪判決の女性

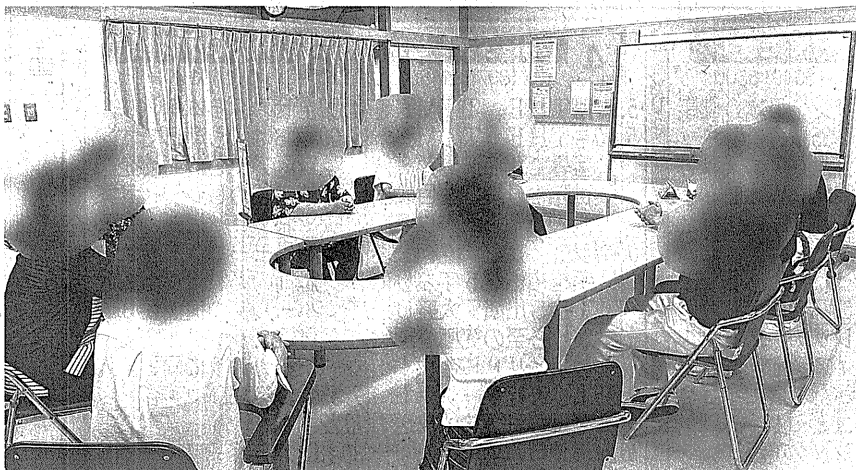
クレプトマニア

窃盗症 衝動と苦悩

衝動を抑えられずに窃盗を繰り返す「クレプトマニア」(窃盗症)という精神疾患が近年、注目されている。専門家は適切な治療の重要性を訴え、患者をフォローする環境も整いつつある。金はあるのに、スリルや高揚感を得るため万引に走る。そんな患者の心理が法廷で明らかにされた。

(喜田あゆみ)

大阪府内の複合施設で働く女性(45)が仕事を終え、施設内のスパーに立ち寄ったのは昨年10月29日昼のことだった。現金は持つており、スマートフォンアプリで決済も



治療の一環で、窃盗症の患者同士で行うミーティングの様子(竹村道夫院長提供、一部画像処理しています)

できるが、選んだのは万引。「1つとつたら一緒に」と、約10分間で茶のパックや入浴剤などを持参したエコバッグに次々と入れていった。その様子を警備員が目撃していた。後を追いかつた。女性の車の前に立ち止まらされた。ボンネットにかまると警備員を振り落とそうと、女性は前進後退を繰り返して、警備員は転落して足を骨折。女性は逃走したが、3日後に逮捕された。

強盗致傷罪に問われ、今年6月に始まった公判で、女性は自身の胸の内を明らかにした。

被告人質問によると、初めて万引したのは高校生の時。勉強への不安や人間関係の悩みが発散できないという。窃盗症の患者同士で行うミーティングの様子(竹村道夫院長提供、一部画像処理しています)

患者集会参加 自分と向き合い回復

クレプトマニアとは…

特徴

- ・万引する必要がないのに少額な商品を繰り返し盗む
- ・窃盗衝動が出ると自制は困難
- ・「心理的飢餓感」を抱え、スリルや成功の満足感を楽しむ
- ・自分の思考や行動パターンを理解し、窃盗衝動を減らす

治療法

→医師との面談、患者同士のミーティング、回復した元患者のアドバイス

※赤城高原ホスピタル竹村道夫院長への取材を基に作成

専門治療や家族の理解必要

「将来の金銭面が不安で節約しないといけない」「周りは遊んでいるのに、なぜ自分だけ我慢しているのか」。そんな思いがあったと訴えた。今回の事件前も同じスパーで万引し、見つかったことがあった。その時は商品代金の弁償で済み、二度と入店しない「出禁」を約束した。ところが、心療内科での診察と合わせ、万引の原因はストレスをコントロールできないことが原因と判明。竹村道夫院長は「衝動を抑えられずに窃盗を繰り返す「クレプトマニア」(窃盗症)という精神疾患が近年、注目されている。専門家は適切な治療の重要性を訴え、患者をフォローする環境も整いつつある。金はあるのに、スリルや高揚感を得るため万引に走る。そんな患者の心理が法廷で明らかにされた。」と訴えた。

窃盗症は、世界保健機関(WHO)の疾病分類で「精神や行動の障害」の一つと位置付けられている。女性の患者が多く、強い窃盗衝動を制御できない状態が繰り返して起こることが特徴で、専門的な治療も行われている。「今回のテーマは『なぜ万引を止められないのか』です」。病院の一室で毎日、朝夕に行われる窃盗症患者同士のミーティング。テーマに沿って順番に自分の意見を話す。名前や個人情報はいりません。他人の発言には質問や言及をしない「言いつばなし、聞きっぱなし」がルールだ。

ミーティングに取り組むのは、窃盗症を専門的に治療する赤城高原ホスピタル(群馬県渋川市)の竹村道夫院長。他人から批判も評価もされない環境で正直に話し、問題に向き合うことが治療の第一歩だといひ、自らの

思考や行動パターンを理解することで窃盗衝動を減らすことを目指す。竹村院長と同僚医師がこれまでに診療してきた常習窃盗の患者は約2500人に上るが、治療につながらないまま再犯を繰り返している人も多いとみられる。刑事司法関係者のほか、医療現場でも窃盗症への理解が十分ではないという。「刑罰は根本的な解決にはならず、再犯を防ぐには専門的な治療が必要だ」と強調する。

患者本人には病気という認識がなく、自らすすんで治療に取り組むケースは少ない。竹村院長は「家族など周囲も窃盗症への理解を深め、適切な治療につなげてほしい」と呼びかけている。